

令和 4 年 5 月 26 日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00874

研究課題名（和文）Setting Personal Learning Goals for English: Can CEFR-J help?

研究課題名（英文）Setting Personal Learning Goals for English: Can CEFR-J help?

研究代表者

谷口 真紀（Taniguchi, Maki）

関西学院大学・建築学部・准教授

研究者番号：90778606

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,200,000円

研究成果の概要（和文）：4年間にわたるアクションリサーチをはじめとする研究にもとづいて、ヨーロッパ言語共通参照枠CEFRを大学生が生涯にわたって英語学習に活かすことができる3つの根拠をまとめることができた。第一にCEFRは他者との比較ではなく自分自身の能力の比較を促す指標である。第二にCEFRには上限がなく柔軟に用いることができる。第三にCEFRは日本だけでなく世界の英語教育で有効に活用できる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本ではヨーロッパ言語共通参照枠CEFRの指標は英語指導者のためのものであることが多いが、本研究では英語学習者の活用を提案した点が最大の意義である。CEFRは大学入学に求められる英語能力の目安だけであってはならない。大学生がCEFRをもとに学習の目標や計画をたてて自分自身のために生涯にわたって英語を学び続けるきっかけづくりのひとつのモデル授業を提案することができた。

研究成果の概要（英文）：We believe there are three reasons why CEFR works as a basis for constructing personalized learning goals. First, CEFR is a personal framework. Second, CEFR is an open-ended framework. Third, CEFR is universal.

研究分野：言語コミュニケーション文化研究

キーワード：CEFR

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

日本ではヨーロッパ言語共通参照枠 CEFR は教員がもっぱら生徒や学生の英語能力の指標として活用してきた。学習者の教科書を選定する際に CEFR のレベルで検討したり、学習者を能力別クラスに振り分ける際に CEFR のレベルで編成したりといった場面で用いられることが多い。何より、大学入学にあたって求められる英語能力の指標として大々的に CEFR が用いられている。

ところが、学習者自身がその指標を英語学習に活かすことについては、これまで日本の英語教育現場で取り組まれてこなかったし、それゆえに議論もあまりなされてこなかった。CEFR は学習者自身が主導権を握って、目的意識をもって、生涯にわたって英語の学びを進めていくための指標でこそあるべきだというのが、本研究の出発点である。同時に、それが研究の独自性であると考えている。

### 2. 研究の目的

本研究の最終ゴールは CEFR を単に学習者の英語能力の到達度をはかる授業者のための指標とするのではなく、学習者が自らの英語学習の道具として活かすことのできる教材・授業実践のモデル・教育手法を開発することであった。そのため、日本の大学生が CEFR をもとに自らの英語学習の目標を設定し、主体的に、積極的に英語学習に取り組む方法を主にアクションリサーチによって探求することを目指した。

### 3. 研究の方法

4 年間におよぶ本研究プロジェクトは以下の 4 つのフェーズで進めた。

#### (1) アンケート調査

予備調査としてアンケート調査を行った。滋賀県立大学の 1 年生ほぼ全員 537 名に対して紙面でアンケートを行い、CEFR についての認識や英語学習のための目標設定の意向をたずね、データを取得することができた。

#### (2) フォーカス・グループ・インタビュー

予備調査をもとに滋賀県内私立高校に勤務する 3 名の英語教員にフォーカス・グループ・インタビューを行った。学習者の認識と教員の認識のギャップを探るためであった。

#### (3) アクションリサーチ

滋賀県立大学の 1 年生向けの必修英語 1 科目で半期にわたるアクションリサーチを行った。受講生が CEFR をもとに自らの英語学習の目標を設定するまでのプロセスをサポートする英語の授業を我々研究者(谷口&ジョーンズ)自らが実践者となって行い、記録をし、評価を行った。授業の方針はライフスキルとしての英語コミュニケーションであった。

#### (4) インタビュー調査

同授業終了後の 1 年半後に受講生 3 名にインタビューを行い、授業で記憶に残っていることや、その後の英語学習の様子をたずねた。

### 4. 研究成果

アンケート調査、フォーカス・グループ・インタビュー、アクションリサーチ、インタビュー調査の結果は以下のとおりである。

#### (1) アンケート調査

英語学習の目標を書き出している学生は全体のわずか 4 パーセントにすぎなかった。英語を学ぶうえで目標を設定してから進めることが有効だとは思いますが、どのように設定するかがよくわからないという声が多かった。

#### (2) フォーカス・グループ・インタビュー

学習者が目指す英語コミュニケーションの目標地点と、教員が目指す目標地点が食い違っているという課題が 3 名の教員側から共通して示された。

#### (1) アクションリサーチ

半期の授業実践のプロセスを通して、次の5点が明らかとなった。第一に、英語はライフスキルのひとつであると学習者の発想転換を促したことが重要な出発点となった。第二に、言語習得そのものではなく自分の生活や人生をベースに英語学習の目標をたてる活動が有効であった。第三に、授業で学習している目の前の知識やスキルと、未来の自分の暮らしや職業の場面で必要となる英語の知識やスキルとをリンクさせる活動が英語学習者のモチベーションを維持するのに役立った。第四に、英語学習の目標設定を他者と共有することで、学生は自分の目標設定を修正したり、問い直したりして、何のために英語を学ぶのかについて考えを深めることができた。第五に、CEFRにもとづく英語学習の目標設定のプロセス自体を授業の活動や評価として組み込むことは可能である。

#### (4) インタビュー調査

3名の受講生はいずれも授業内容をよく記憶しており、CEFRを用いて設定した自分の英語学習の目標は定着していた。しかし、その目標を修正したり、新たに展開させたりという段階にまではいたっていなかった。

以上から次のような結論に至った。まず、英語学習者がCEFRをもとに目標を設定するのに有効なのは、CEFRの指標が他者との比較ではなく、過去の自分や未来の自分と現在の自分を結んでくれるからである。次に、CEFRが生涯にわたる英語学習の動機を高めるのは、「～点取得」や「～級合格」などという他者が設定する最終ゴールに学習者が向かうからではなく、あくまで自分が達成したい、自分のためだけのゴールに学習者が向かうのを導くからである。最後に、CEFRがライフスキルとしての英語力の向上を目指す姿勢を促すのは、特定の専門分野を専攻する英語学習者ではなく、広く英語を道具として活用したいと願うすべての英語学習者をターゲットにできるからである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Maki Taniguchi & Graham Jones	4. 巻 25
2. 論文標題 Giving Students Ownership of themselves: How CEFR can be Used to Set Personal Language Learning Goals	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Kobe JALT Journal	6. 最初と最後の頁 37-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Maki Taniguchi & Graham Jones	4. 巻 25
2. 論文標題 Can Team Working Shape Social Learning and Social Capital?: A Case Study of Team Teaching at University in Japan	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 関西学院大学言語教育センター紀要『言語と文化』	6. 最初と最後の頁 65-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Maki Taniguchi
2. 発表標題 Team Teaching is Team Learning: Experiences from a University in Japan
3. 学会等名 CamTESOL（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Graham Jones
2. 発表標題 Personal Goal Setting: "breaking barriers" with CEFR
3. 学会等名 TESOL-SPAIN（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 谷口真紀
2. 発表標題 Giving students ownership of themselves: how CEFR can be used to set personal language-learning goals
3. 学会等名 International Society for Language Studies (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	ジョーンズ グラハム  (Jones Gaham)	滋賀県立大学・人間文化学部・非常勤講師	
	(20815146)	(24201)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------